

養護教諭の視点から児童・生徒の教育的ニーズに 対応するチーム支援の充実をめざした研究

— 教育相談コーディネーターと校内支援体制の実状に着目した調査研究を通じて —

高松 真砂子¹

児童・生徒が抱える現代的な健康課題に対し、教育相談コーディネーターを中心とした、全教職員で協働する校内支援体制の整備が求められている。本研究では、小・中学校の教育相談コーディネーターの配置と校内支援体制の実状と意識調査を行い、養護教諭の視点からチーム支援を充実させる手立てを考察した。その成果として、児童理解を深める「児童の情報伝達シート」と「児童の情報共有・引継ぎシート」を作成した。

はじめに

近年、少子高齢化の進行や国際化・情報化の進展等の急速な社会の変化に伴い、児童・生徒をめぐる状況が大きく変わってきている。「現代的健康課題を抱える子供たちへの支援～養護教諭の役割を中心として～」では、「多様化・複雑化する児童生徒が抱える現代的な健康課題については、専門的な視点での対応が必要であり、養護教諭が専門性を生かしつつ中心的な役割を果たすことが期待される」と述べられている(文部科学省 2017年)。

また、「支援を必要とする児童・生徒の教育のために」には、教育相談コーディネーター(以下、「CO」とする)について、「教育的ニーズがある子どもたちを支える教職員や保護者、地域の関係者などの支援者は、それぞれの立場を生かして協働を進め、ケース会議などチームによる支援を行っています。そのチームのキーパーソンが教育相談コーディネーター」「教育相談コーディネーターを軸として、チームで相談や支援をしていくことが大切」と記されている(神奈川県立総合教育センター 2019年)。COはチーム支援の中心的な存在として様々な役割が求められており、COを複数体制にしている学校もある。

長谷部らは、コーディネーターにとって「校内でのサポートが役割ストレス軽減に有効である」としており「養護教諭のサポートがあることで、過重な負担感が低いことから、学校内において養護教諭は、コーディネーターと協働する役割を果たしている可能性が考えられる」と述べている(長谷部他 2012)。

養護教諭は、従来コーディネーター的な役割を果たしており、実際にCOを担当している養護教諭もいる。

秋光らは、「養護教諭がコーディネーターとしての

活動を活発化することは、養護教諭自身の職務満足感全般に対して正の影響を及ぼすことが、本研究によって明らかにされた」としている。一方で、「他の分掌を兼務することは養護教諭の多忙さや負担感といった悩みをさらに増悪させる可能性がある」とも述べている(秋光他 2010)。

所属校でも、教職員間での児童の情報共有や児童の支援に関わる体制に対する課題があった。

以上のことから、校内での効果的なチーム支援を実現するためには、COを軸として、教職員が協働していくことが重要である。

本研究をとおして、COの配置状況と校内支援体制の実状を調査し、校内支援体制を充実させるために、養護教諭としてどのように関わるとよいかを、「連携」「情報共有」「児童・生徒の支援に関する会議」の3つの視点から分析・考察し、チーム支援の充実につなげたいと考えた。

研究の目的

本研究では、養護教諭の視点から校内支援体制をより充実させるための手立てを考察し、児童・生徒の教育的ニーズに対応するチーム支援をめざすことを目的とする。

研究の内容

1 実態調査

(1) 質問紙調査

ア 目的

平塚市立小・中学校のCOの配置状況と各校の校内支援体制と、「連携」「情報共有」「児童・生徒の支援に関する会議」の実状を把握する。

イ 方法等

令和元年8月～9月に、平塚市立小・中学校43校のCOと養護教諭を対象に、COの配置状況と校内支援

1 平塚市立港小学校

研究分野(一人ひとりのニーズに応じた教育研究支援教育)

体制に関する質問紙調査(選択式・自由記述)を行った。

(2) 聞き取り調査

ア 目的

チーム支援を行う上での校内支援体制と、「連携」「情報共有」「児童・生徒の支援に関する会議」についての課題と各校の取組を把握する。

イ 方法等

令和元年8月下旬～9月上旬にかけて、平塚市内7校の小・中学校の養護教諭とCOを対象に聞き取り調査を行った。

2 実態調査の結果

質問紙調査は、小学校は28校中26校、中学校は15校中15校の計41校から回答を得た(回収率95.3%)。

対象者別の質問紙を使い、養護教諭のCOは6名、養護教諭は35名、教諭のCOは38名から回答を得た。養護教諭の複数配置校と、教諭のCOを複数体制にしている学校は、代表者1名が回答した。

(1) COの体制

COの体制は、以下のとおりである(第1表)。二人体制と三人体制は、いずれも児童数500人未満の小・中規模校だった。

第1表 COの体制(単位:校)

	一人体制	二人体制	三人体制	合計
小学校	20 (77%)	5 (19%)	1 (4%)	26 (100%)
中学校	15 (100%)	0 (0%)	0 (0%)	15 (100%)

(2) COの校内での立場

小学校では、通常学級担任が44%、特別支援学級担任が36%と担任をしているCOが80%を占めた。中学校では、通常学級担任が14%、特別支援学級担任が29%と担任をしているCOが43%を占め、副担任が21%と続いた。

(3) COの週の担当授業時間数

小学校では、26時間以上が63%、21～25時間が25%、1～5時間が4%、「授業を担当していない」が8%だった。中学校では、21～25時間が43%、16～20時間が36%、11～15時間が21%だった。中学校は教科担任制のため小学校より担当授業時間数が少なかった。

(4) COに対する校内での配慮

「COを担当する上で、校内で業務上の何らかの配慮がされていますか」という質問に対し、「はい」と回答したCOは、小学校では38%、中学校では29%だった。養護教諭のCOは、6人中6人が「いいえ」と回答した。具体的な校内での配慮については、「担当授業時間数を減らす」「グループ業務の軽減」「後補充非常勤講師の配置(インクルーシブ教育校内支援体制整備事業)」があった。

(5) 担任をしているCOに対する校内での配慮

配慮があるCOは、小学校では25%、中学校では

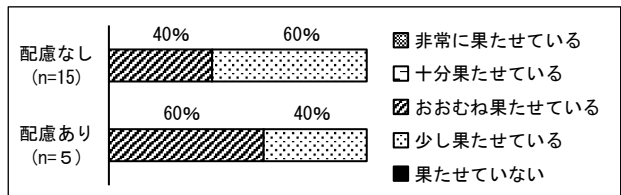
0%であり、担任をしているCOへの配慮が低かった。

3 実態調査の考察

(1) 校内支援体制

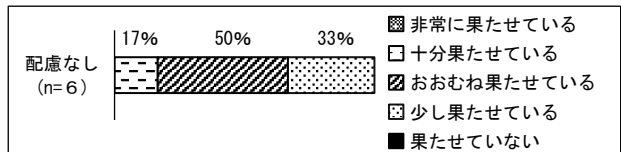
ア 担任をしているCOに対する校内での配慮とCOの「役割を果たしている」に関する分析

「COの業務をどのくらい果たしていると感じますか」という質問に、小学校では、校内での配慮があるCOは「おおむね果たしている」と60%が回答し、配慮がないCOが回答した40%よりも高かった(第1図)。このことから、COへの校内での配慮があることで、時間的に業務を遂行しやすくなり、「役割を果たしている」割合が高かったと考える。



第1図 校内での配慮とCOの「役割を果たしている」(小学校)

一方、中学校では「十分に果たしている」と「おおむね果たしている」を合わせると67%だった(第2図)。中学校のCOは教科担任制のため、CO業務に時間をかけることができ、「役割を果たしている」割合が高かったと考える。



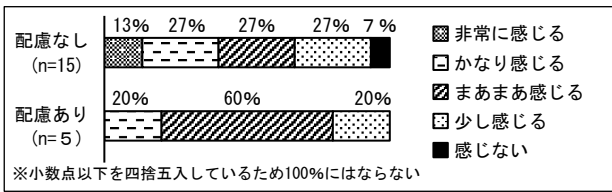
第2図 校内での配慮とCOの「役割を果たしている」(中学校)

イ 担任をしているCOに対する校内での配慮とCOの負担感に関する分析

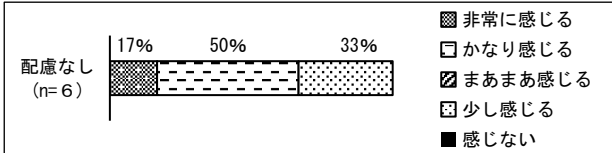
「COを担当していて負担を感じますか」という質問に、小学校では、校内での配慮があるCOは「かなり感じる」と20%が回答し、配慮がないCOでは「非常に感じる」と「かなり感じる」を合わせて40%となり、校内での配慮があるCOの方が負担感が低かった(第3図)。これは、校内での配慮により、COに時間的な余裕がもたらされているためと考える。ただし、配慮のあるCOでも、「まあまあ感じる」を合わせると負担感が80%となり、COが負担を感じる要因は、「校内での配慮」だけではないと考える。調査結果から、「CO前任者が異動しており、引継ぎや資料がなくて困った」「出張が増え、学級のことを行う時間が足りない」「特別支援学級へ措置替えをする児童が多く、手続きが大変である」等の回答があり、様々な要因が負担感につながっていると考える。

一方、中学校のCOでは「非常に感じる」と「かなり感じる」を合わせると67%だった(第4図)。中学校

では、人間関係のトラブル、不登校、家庭内の課題等の思春期に特徴的な課題に対してCOが関わるケースも多く、負担感が高かったと考える。



第3図 校内での配慮とCOの負担感(小学校)



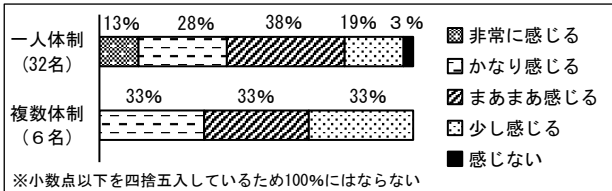
第4図 校内での配慮とCOの負担感(中学校)

ウ COの複数体制について

COの複数体制は、教諭同士の組合せが2校、教諭と養護教諭の組み合わせが4校だった。

複数体制のメリットとして、「相談できる」「分担できる」「引継ぎがスムーズ」等の回答があった。一方、調査結果から、複数体制に対し「デメリットはない」という回答が多かったが、「情報共有ができない」とデメリットになるかもしれない「二人の見立てが違ったときの対応をどうするか」等の回答があった。

COの体制とCOの負担感の分析では、一人体制のCOは、複数体制のCOよりも負担感が高いという結果が出ていることから(第5図)、一人体制でCOを担当する場合の負担感と比較すると、複数体制のメリットの方が大きいと考える。



第5図 COの体制とCOの負担感(小・中学校)

実状では、複数体制は小・中規模校で行われているが、教育的ニーズのある児童・生徒の数が多くと推測される大規模校こそ、COの複数体制を導入することで、COの負担軽減につながると考える。

エ 養護教諭のCOについて

「役割を果たせている」については、6人中2人が「おおむね果たせている」、4人が「少し果たせている」と回答した。負担については、6人中5人が「かなり感じる」、1人が「少し感じる」と回答した。

養護教諭は校内での配慮がなく、保健室業務の軽減もないため、負担が大きいと考える。

オ 各校の課題と取組

質問紙調査の「組織的な校内支援体制の充実のために課題と感ずること(複数回答)」において、小学校教諭では「支援を行う時間が確保しづらい」が88%だった。前述のように、小学校では担任をしているCOが

80%、担当授業時数26時間以上が63%であることから、COが支援を行う時間を確保する必要性が改めて明らかになった。続いて「専門的な知識や技能、方法を学ぶ機会が少ない」が58%だった。一方、中学校教諭では「専門的な知識や技能、方法を学ぶ機会が少ない」が85%であり、職員研修の必要性が明らかになった。続いて「支援を行う時間が確保しづらい」が69%だった。養護教諭のCOでは「支援を行う時間が確保しづらい」と6人中6人が回答し、小学校教諭と同様に、COが支援を行う時間を確保する必要性が明らかになった。各校の課題と取組は、以下のとおりである(第2表)。

第2表 校内支援体制に関する各校の課題と取組

課題	取組
<ul style="list-style-type: none"> ・担任との兼務は時間的にも精神的にも厳しい ・空き時間が支援を行う時間になる ・健康診断の時期が養護教諭の仕事で手一杯になる ・養護教諭のCOは、学習支援への介入が難しい ・専門性に自信がなく、力を発揮できていない ・COへの「校内での配慮」を教職員が知らない ・COを専任にできない 	<ul style="list-style-type: none"> ・COを複数配置にしている ・COが支援を行う時間を確保し、時間割に組んでいる ・学習支援や個別指導は、教諭のCOが担当している ・相談しやすい職場の雰囲気づくりをしている ・管理職も生徒を理解しているため、対応が早い ・生徒の別室「みんなの教室」があり、教員を交代で配置している(時間割に組まれている)

カ 必要な手立て

第一に、COが支援を行う時間の確保である。そのために校内でできる取組として、担当授業時間数を減らす、COが支援を行う時間を時間割に組み込む等がある。このような校内支援体制及びCOへの配慮は、管理職から年度始めに全教職員へ周知し、理解・協力を図ることが重要と考える。そして、担任をしているCOは担当授業時間数が多く負担が大きいいため、COを複数体制にする等の校内での配慮が必要と考える。養護教諭がCOを担当する場合も、CO業務に対する負担を考慮し、COを複数体制にする、グループ業務を軽減する等の校内での配慮が必要である。また、調査結果の中で、COの専任化を望む声が多くあった。専任のCOは、時間に余裕をもって支援を行うことができ、養護教諭とも連携がしやすいと考える。

第二に、支援教育に関する研修(校内研修・校外研修)の充実である。COと養護教諭は、支援教育に関する校外研修へ積極的に参加し、日頃より知識・技能を高める必要がある。そして、チーム支援の充実のためには、全教職員の支援教育に関する知識・技能をスキルアップさせる必要がある。そのためには、校内研修を定期的で開催していくことが重要と考える。調査結果から、「支援会議の際に、通常学級でできる支援のワンポイント研修を行っている」という小学校の実践があった。スクールカウンセラー(以下、「SC」とする)・スクールソーシャルワーカー(以下、「SSW」とする)を講師にした研修会の開催や、会議の

中で短時間でできる研修会等を設定できるとよい。

キ 養護教諭としての関わり

COや担任と協働し、教育的ニーズのある児童・生徒の観察や、養護教諭の専門的知識をいかして適切な対応をチームで行うことが必要と考える。また、食物アレルギーや健康に課題のある児童・生徒の対応のために、養護教諭が中心となって緊急時の校内体制を整備し、学校医や関係機関の専門職等への講師依頼も含めた職員研修を開催する。

(2) 連携

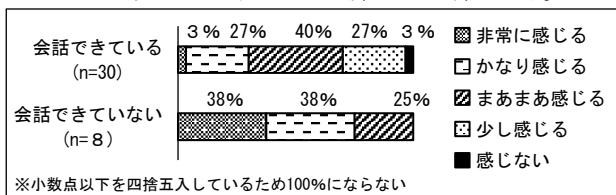
ア COと養護教諭との連携

(7) 分析結果

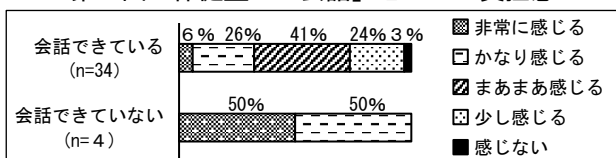
質問紙調査の「COと養護教諭の普段の関わりについて」の質問では「保健室での会話」「職員室での会話」「相談」に関する回答を得た。

「頻繁にする」「時々する」を「できている」に分類、「あまりしない」「ほとんどしない」を「できていない」に分類し、負担感に関する分析を行った。その結果、保健室での会話ができているCOは、会話ができているCOよりも負担感が低かった(第6図)。

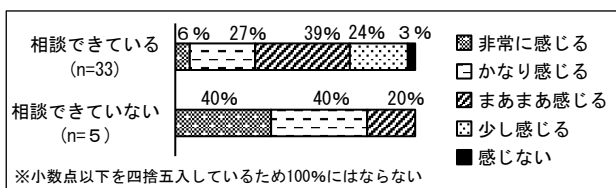
養護教諭との「職員室での会話」と「相談」についても同様に、「できている」COは、「できていない」COよりも負担感が低かった(第7図・第8図)。



第6図 「保健室での会話」とCOの負担感



第7図 「職員室での会話」とCOの負担感



第8図 「相談」とCOの負担感

以上のことから、CO業務に従事する上で、会話や相談等の「養護教諭との関わり」の有無がCOの負担感と相関することを改めて認識できた。従来、養護教諭はコーディネーター的な役割を果たしており、全校児童・生徒の情報を把握している。調査結果からも、「多くの場面で、養護教諭にフォローしてもらっている」「保健室での生徒の様子を知らせてもらおうと、担任が動きやすい」というCOの回答があった。養護教諭と連携することで、COは負担感が軽減されるだけでなく、児童・生徒の情報を得ながら、コーディネ

ーターとしての役割を果たすことができると考える。

(イ) 各校の課題と取組

調査結果から、COが担任をしていると、COと養護教諭が互いに連携がとりにくいという課題がある(第3表)。「COとSCの連絡会に養護教諭も参加している」のように、連携時間を設定して情報共有している中学校の実践があった。このような手立てがあると、CO・養護教諭・SCで児童・生徒の情報共有をしたり、必要な支援について話し合ったりする時間が保証され、チーム支援の充実につながると考える。

第3表 「COと養護教諭との連携」に関する各校の課題と取組

課題	取組
<ul style="list-style-type: none"> 担任がCOを兼ねると養護教諭と連携しづらい 養護教諭を含めた打合せ時間が取りにくい 	<ul style="list-style-type: none"> COは養護教諭へ、気になる生徒の情報を提供している COは校内巡回し、保健室に居る生徒へ声をかけている 保健室で関わった児童の様子を担当やCOへ話している COとSCの連絡会に、養護教諭も参加している COと養護教諭が、職員室で話す時間を設定している 養護教諭も教室の児童を観察したり、職員室で教職員の話を聞いたりして、児童の情報を把握している

イ 複数体制のCO同士の連携

調査結果より、「情報共有を意識して行っている」「支援計画の作成や個別指導の児童への対応は、教諭のCOが担当している」「担任のCOは授業があるため、教室の児童の様子は養護教諭のCOが見に行っている」等の回答があった。複数体制のメリットをいかにするためには、CO同士の情報共有と役割分担が重要であるといえる。

ウ COと管理職との連携

調査結果より、「管理職が児童相談所等の関係機関の窓口をしている」「管理職がケース会議に毎回参加している」「管理職は生徒を理解しているため、対応が早い」等の回答があった。一方、課題としては、「すぐに対応をお願いしたいが、叶わないことがある」という回答があった。COは管理職に日頃から報告・連絡・相談を適切に行い、情報共有するとともに、「児童・生徒の支援に関する会議」や職員研修を計画的に開催することが必要と考える。

エ COと担任との連携

調査結果より、「気になる生徒については、担任と情報共有している」「色々な支援の方法を情報提供するが、最終的には担任に決めてもらっている」「支援の時間を確保して担任の先生方へ周知したら、『児童を見に来てほしい』と声がかかるようになった」等の取組があった。COは、日頃から担任や学年主任とコミュニケーションをとり、COが支援を行うことのできる時間を教職員へ周知することで、担任は気になる児童について、COへ相談がしやすくなると思う。

オ 必要な手立てと養護教諭としての関わり

教職員とのコミュニケーションを大切にし、CO・SCと情報共有した児童・生徒の状況をふまえて、養

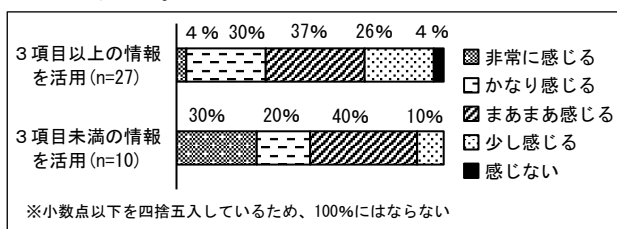
護教諭は保健室で児童・生徒と関わったり、校内巡回したりする。放課後は、養護教諭も職員室で仕事をしながら、COや担任等の教職員と児童・生徒の情報共有を図ることも重要と考える。

(3) 情報共有

ア 分析結果

COが活用している保健室の情報として、「欠席状況」「保健室利用状況」「児童・生徒の特性」「保健室登校・別室登校の児童・生徒の情報」が多かった。

情報共有とCOの負担に関する分析では、保健室の情報を3項目以上活用しているCOは、3項目未満を活用しているCOよりも負担感が低かった(第9図)。以上の結果から、養護教諭はCOが必要としている情報を把握し、積極的に情報発信していくことが重要であると考えられる。



第9図 「情報共有」とCOの負担感

イ 各校の課題と取組

第4表のような課題に対し、連絡シート、回覧ファイル、パソコンの共有フォルダ等を活用し、児童・生徒の情報を集約している取組がある(第4表)。COに情報が集まり、COが情報発信することで、全教職員で情報を共有することで、チーム支援の充実につながると考える。

第4表 「情報共有」に関する各校の課題と取組

課題	取組
<ul style="list-style-type: none"> 担任との兼務で生徒情報が入ってこない 養護教諭へ必要な生徒の情報が伝わっていない 教育的ニーズのある児童に関する情報の蓄積が少ない CO不在時対応した教職員と情報共有がなされていない 	<ul style="list-style-type: none"> 連絡シートを活用して、教職員へ伝達している 児童に関するファイルを回覧・情報共有している パソコンの共有フォルダを活用し、情報共有している

ウ 必要な手立て

個人情報の管理を徹底しながら、連絡シート、回覧ファイル、パソコンの共有フォルダ等の各校の実状に合わせた教職員間での情報共有の手立てが必要と考える。また、CO不在時に支援に関わる対応をした教職員は、メモや連絡シート等で情報を可視化し、COへ伝達することが重要である。

エ 養護教諭としての関わり

積極的に保健室の情報を発信する。保健室で把握した児童・生徒の情報を日常的にCO・担任へ口頭や紙媒体で提供したり、会議の中で情報提供したりする。

オ 情報共有シートの作成

以上の課題をふまえ、担任からCOへ相談がしやすく、COへ確実に児童の情報が集まるようにするため、「児童の情報伝達シート」を作成した。また、多忙で

ある教職員が日常や会議の場で、確実かつ迅速に情報共有することができ、児童の全体像が可視化され、継続的な児童情報の蓄積ができるようにするため、「児童の情報共有・引継ぎシート」を作成した。

(ア) 児童の情報伝達シート

所属校のCOと協議を重ね、担任が負担なく記入できる形式にし、「保健室からの情報」欄と、児童が必要な支援につながるような項目を設けた(第10図)。シートの流れは、担任→CO→養護教諭とした。

希望する対応に○をつけてください。	1 COに児童を見てほしい 2 SCに児童を見てほしい 3 養護教諭に児童を見てほしい 4 関係者で話し合いを持ちたい 5 COも入った保護者との三者面談を希望 6 関係機関へつないでほしい 7 その他 []
保健室からの情報 (欠席状況・保健室利用状況・健康診断結果・疾病歴等)	記入例 歯科検診：未処置歯 12本 疾病歴：喘息 食物アレルギー(卵)

第10図 児童の情報伝達シート(一部抜粋)

(イ) 児童の情報共有・引継ぎシート

平塚市立小・中学校で使用しているシートの内容を参考にして作成し、シート1枚で教育的ニーズのある児童の全体像が見えるように配慮した(第11図)。

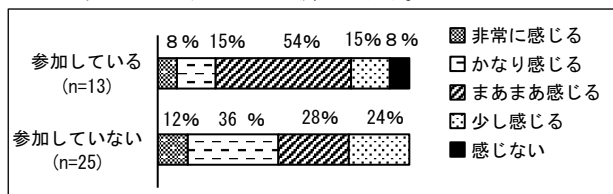
平塚市立小・中学校			
児童	児童の情報共有・引継ぎシート		
顔写真	児童氏名 () 性別 ()		
	1年担任 ()	2年担任 ()	3年担任 ()
良いところ できること			
気になるところ できないこと つけない方			
手立て (短期的・長期的)			
家庭環境 保護者の考え			
つながっている 関係機関			
保健室からの情報 (欠席状況・保健室利用状況・健康診断結果・疾病歴等)			

第11図 児童の情報共有・引継ぎシート(表面)

(4) 児童・生徒の支援に関する会議

ア 分析結果

「児童・生徒の支援に関する会議」とCOの負担感に関する分析結果では、養護教諭が会議に毎回参加している学校のCOの方が、参加していない学校のCOよりも負担感が低かった(第12図)。



第12図 養護教諭の「児童・生徒の支援に関する会議」への参加とCOの負担感

イ 各校の課題と取組

「児童・生徒の支援に関する会議」が定期的開催され、養護教諭を含む関係職員が必ず参加し、効率よく会議を運営するための取組があると、チーム支援が

充実すると考える(第5表)。

第5表 「児童・生徒の支援に関する会議」に関する各校の課題と取組

課題	<ul style="list-style-type: none"> ・会議の設定とメンバー調整が大変である ・養護教諭にケース会議の声がかからない
取組	<ul style="list-style-type: none"> ・支援会議前に、COと養護教諭で情報共有している ・ケース会議を定期的開催している ・タイムキーパーを置き、時間厳守で進めている ・ケース会議をSCの来校日に設定し、管理職、養護教諭、SSWも毎回参加している ・会議に挙げたい生徒がないか各学年へ声をかけている

ウ 必要な手立てと養護教諭としての関わり

養護教諭は、積極的に会議へ参加できるとよい。そして、会議では「児童の情報共有・引継ぎシート」を活用し、教職員でより良い支援の手立てを考えていく。会議前に、養護教諭が把握している児童の情報をシート上の「保健室からの情報」欄に記入しておく。

4 教育相談専任(CO)配置校の学校見学を終えて

教育相談専任(CO)は担任を持たず、校内巡回しながら児童を観察したり、別室登校の児童と関わったり、時間に余裕を持って業務を行っている様子が伺えた(第6表)。しかし、COが専任であったとしても、一人に任せるのではなく、全教職員が協働することが重要である。そのためには、管理職の理解・協力を得ながら、各学校の事情に合わせて、COを軸とした校内支援体制を整備することが不可欠であるといえる。

第6表 教育相談専任(CO)の様子

一日の流れ	<ul style="list-style-type: none"> ・朝、児童を迎える(校門) ・不登校児童等の出席確認(保健室) ・別室登校児童の対応(少人数教室) ・校内巡回、教室の児童を観察する ・教職員と情報共有(職員室) ・必要時、教育相談やケース会議の開催
メリット	<ul style="list-style-type: none"> ・別室登校の児童をみるができる ・コーディネートしやすい ・教室の児童を観察したり、保護者の相談に応じたりしやすい ・担任経験をいかすことができる
デメリット	<ul style="list-style-type: none"> ・一人に任されてしまうと、学校としてはチームになりにくい面もある

研究のまとめ

1 研究の成果

実態調査をととして、平塚市立小・中学校のCOの配置状況と校内支援体制について把握し、各校の課題と取組内容について知ることができた。小学校と中学校の両方を調査したことで、校種によるそれぞれの良い取組や課題を把握することができ、校内支援体制を充実させるために、「連携」「情報共有」「児童・生徒の支援に関する会議」の3つの視点から、養護教諭の関わりを中心に、チーム支援を充実させるための手立てを示すことができた。そして、児童・生徒の教育的ニーズに対応するための手立てとして、「児童の情

報伝達シート」と「児童の情報共有・引継ぎシート」を作成した。

2 研究の課題と今後の展望

現在、所属校では作成した情報共有シートを試用している。所属校からの意見を参考に、シートを改良し、より使いやすいものにしたと考える。そして、調査に協力いただいた平塚市立小・中学校と養護教諭研究会へ、研究の成果を還元していきたい。

また、調査の中で、「他校のCOがどのようにしているか知りたい」「市で共通の様式があったら良いと思う」「簡略化できるところなど、アイデアを知りたい」等の意見があった。今後、平塚市教育相談コーディネーター担当者会や平塚市の校務支援システム等を活用した「CO同士の情報共有の場づくり」が必要になると考える。

おわりに

本研究の調査の成果をいかし、情報共有シートを活用して、一層チーム支援を充実させていきたいと考える。最後に、御多用の中、研究に協力いただいた所属校の校長をはじめ、平塚市立小・中学校のCO・養護教諭の方々、そして、神奈川県立保健福祉大学の高橋佐和子准教授に深く感謝申し上げる。

引用文献

- 神奈川県立総合教育センター 2019 「支援を必要とする児童・生徒の教育のために」 p. 4
 文部科学省 2017 「現代的健康課題を抱える子供たちへの支援～養護教諭の役割を中心として～」 p. 1
 秋光恵子・白木豊美 2010 「チーム援助に関するコーディネーション行動とその基盤となる能力・権限が養護教諭の職務満足感に及ぼす影響」(教育心理学研究第58巻第1号) pp. 42-43
 長谷部慶章・阿部博子・中村真理 2012 「小・中学校における特別支援教育コーディネーターの役割ストレスに関連する要因」(特殊教育学研究49巻5号) p. 465

参考文献

- 椎野裕人・持田訓子・山本美織・金森万美江・田中恵美 2016 「神奈川の支援教育の成果に関する調査研究－教育相談コーディネーターの取組に焦点を当てて－」(神奈川県立総合教育センター『研究集録 第35集』)
 山本典恵 2018 「養護教諭の健康相談をいかした情報発信とチーム支援の在り方」(神奈川県立総合教育センター『平成29年度長期研究員研究報告 第16集』)